

さまざまな人の、さまざまな表現を伝え続ける —投稿誌・同人誌の魅力—

平野 泉(立教大学共生社会研究センター・アーキビスト)



2020年春先からの新型コロナウイルス感染拡大により、何が減ったとって実際に人と会う機会が減りました。ちょっとした打ち合わせや会議、授業や講演会などのイベントもオンラインになり、以前は事前に印刷して当日配布していた資料などもデジタル媒体で配布・共有されます。時のニュースや話題に対して誰もがSNSなどで気軽に反応し、そうしたやり取りの「炎上」が誰かの謝罪や辞任につながることも、日常の一部になりました。何もかもが仮想的(バーチャル)になって



データベース入力作業中のスタッフ

速度を増していく中、ミニコミは相も変わらず、人の手によってリアルに作られ続けています。センターも、これまた相も変わらず、開封して取り出したミニコミにラベルを貼ってデータベースに登録し書架に並べるといった地道な作業を続けています。

さて、多様な言葉や表現を伝えるミニコミと言えば、やはり投稿誌・同人誌です。センターのミニコミ・コレクションの基盤は住民図書館(1976-2001)収集資料なので、どちらかという運動に関連したものが多く、投稿・同人誌などは少なめです。試しに「同人」「投稿」の2つのキーワードでデータベースを検索してみると、「同人」99タイトル、「投稿」94タイトルがヒットしました。センターのキーワードは完全とは言えず、検索から漏れるものも多いのですが、まずは検索結果をリストにして眺めてみました。すると①住民図書館設立より前のものがけっこうある ②特定の1号だけ所蔵しているタイトルが61件もある、ことがわかりました。ミニコミにはそれを支える歴史や人脈があり、多くの場合読み手もそれを共有しています。昔のミニコミ、しかも投稿誌を1号だけ読むってどんな感じなのでしょう?——そこでこれらの1号(だけ所蔵)ミニコミのうち、1960-70年代に発行された33点を書庫から取り出して読んでみることにしました。

最も古いものは『疎開派』第1号(1963年1月10日発行、神奈川県)。これは全体が明らかにコピーで、住民図書館館長の丸山尚さんのものらしき書き込みがあります。「丸山さんが執筆のために資料として集めたものでは?」と思い調べてみると、『ミニコミ戦後史』(三一書房、1985年)71-74ページに「学童疎開の世代『疎開派』」という項目がありましたので、ご興味のある方は丸山さ

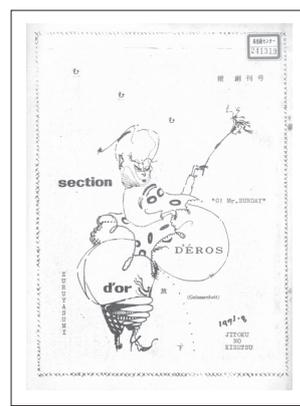


んのご本を手にとってみてください。「他の1号ミニコミのことも丸山さんが書かれているのでは」と期待してページをめくってみました。世の中そう甘くはありませんでした。

まじめな文芸同人誌である『河』第10号(河の会、1979年5月1日発行、広島県)、『紅炉』第26号(紅炉の会、1973年3月5日発行、静岡県)などは、(おそらく)毎号に会の決まりがきちんと掲載されているので、どんな人たちがどんな思いで作っていたミニコミかはすぐにわかります。『紅炉』には芦川照江さんの連載「富士公書闘争と私」(第2回)が掲載されていますので、住民運動つながりで丸山さんの手元に渡ったのかもしれない。



もっとも正体がかみにくいのは『むむむ!』續創刊号(編集責任者:中原和昭、1971年8月1日発行、東京都)や『なつかしい街』第4号(1978年4月1日発行、編集者:工藤肇、東京都)のような、若者がおもしろがって作っている(と思われる)ミニコミです。こうしたミニコミはまさに何でもありの内容で、手描きの文字やイラストには一時期の学園祭パンフレットに似たノリが感じられます。



驚いたのは『むむむ!』に掲載されたマンガ家の真崎守さんのインタビュー。アポイントもなく「二時間近く、東京郊外をさまよった末」に「突然お邪魔」してしまった若者数名の質問に、真崎さんがとても率直に答えています。こんなことができたとは……コロナ禍とかかわりなく、いまや知らない人の家を突然訪ねるといったことは不可能なのではないでしょうか。

というわけで、古めの同人・投稿誌を1号だけ読むのも、意外と楽しい経験でした。とはいえ、やはり一つのミニコミを何年分も読み続けると、そのミニコミの歴史や、同人や投稿者一人一人の人となりや少しずつ見えてきます。作り手と読み手の双方がゆっくりと時間をかけることで、一つ一つの表現をより深く味わえるようになる。そうした、速さを求めず時を味方とする関係づくりはミニコミの得意分野です。そこで今号では、たくさんの方の思い思いの言葉や表現を長い間伝え続けてきたミニコミ発行者の方にご寄稿をお願いしました。それぞれの物語を、ゆっくりと味わってください。



普通の女のありのままの思いを書き留める

前 みつ子(投稿誌『Wife』編集長)

●「好きな人と結婚できて幸せ」

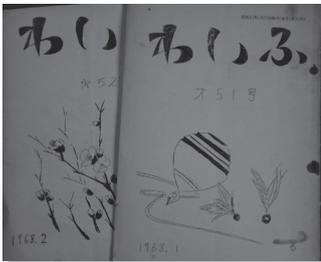
スタートは1963年、兵庫県宝塚市の若い母親たちによる手作り感あふれる冊子でした。文頭に書かれていたのは、「好きな人と結婚できて幸せ…」夫と子どもと、憧れの団地での暮らしは、夢が叶ったと思っていたけれど、頼りの夫は働き蜂、顔を合わせるのは子どもと主婦だけで、口をきく大人は御用聞きの人くらい、社会から遮断され取り残されていく焦りや不安を書いて、ガリ刷りで配っていました。そんな物言う母親たちの冊子が珍しかったのか、思いがけず広がりを見せたのです。

ところが、10年もたつと、編集の中心だった人たちは次々に仕事を捨てて社会に飛び出し、『わいふ』は廃刊することに…。

●女性解放の時流に乗った第2期

夫の転勤で東京に引っ越した投稿者の一人が、PTAで知り合った田中喜美子を編集長に祭り上げて『わいふ』の発行を引き継いだのが、1975年です。折しも男女雇用機会均等法の成立(1985年)などに向けて世の中全体が動きはじめた頃。各自治体はいつせいに男女共同参画の精神を掲げて、様々な企画が組まれるようになりました。「主婦も経済的自立を」「再就職セミナー」などを軸に、編集長は講演を重ね『わいふ』の存在感を知らしめていったのです。

男女平等の教育を受けながらも大学卒の女には就職先がない、就職できて、結婚や出産を機に仕



スタート当時の『わいふ』は手作り(筆者提供)

事を辞めざるを得ず、家事や子育てに悶々としていた団塊世代の女たちの心をつかんだ『わいふ』は、順調に会員数を伸ばしていきました。しかし、専業主婦という立場から飛び出した女性たちは、同時に『わいふ』からも羽ばたき、会員は目に見えて減っていきました。

●『わいふ』から『Wife』へ

ワイフ・家内・主婦と、女をひとくりにする時代は終わりました。2006年、『Wife』と名を変えて再スタートした第3期の根幹にあるのは「women's

life」=女の生活、様々な生き方を模索する女たちの生の声を集めることです。立派な研究や頭の中だけの学問ではない、毎日の暮らしの中で思うこと、理不尽、戸惑いなどを書き留めて発表する場です。文章はうまくなくてもいい、作り事でない正直な思いが読む人の共感を生みます。さらに書く事によって自分の中のモヤモヤが整理され、前に進むことができるのです。

今、女性の生き方はより自由に多様化されています。だからこそ余計に、迷い、悩み、生きづらくなっているのは間違いありません。女はこうあるべしと、役割が決まっていた時代とは別の苛立ちが生まれています。そんな人間の本音がまた、面白いのです。

投稿誌『Wife』は来年の夏で400号を迎えます。その先いつまで続けられるかわかりませんが、孤軍奮闘、もうしばらく頑張っていきたいと思います。「投稿誌Wife」と検索して、ぜひホームページをご覧ください。



『Wife』396号(2021年8月1日発行)

渾沌志向の『ブブ』



白戸 郁夫(『ブブ』編集発行人)



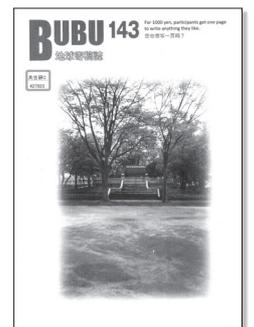
『ブブ』創刊号(1986年3月1日発行)

『ブブ』はB5サイズで1人1ページ、誰が何を書いてもよい季刊の自由寄稿誌です。参加費千円で原稿が掲載された号が配本されます。原稿はワープロでも手書きでもタテ書きでもヨコ書きでも、どの言語でもOKです。内容もエッセイ、ひとりごと、詩、創作、主張、活動の宣伝、イラスト、マンガ、写真など何でも表現できます。寄稿者の生原稿をそのまま印刷して発行するスタイルは1986年の創刊号から全く変わっていません。テーマもなく自由度バツグンなので、てんでばらばらの世界。プロの作家やイラストレーターの作品と子どもの落書きが並んでしまいます。近年は海外からの参加者も増えているので読めないページもあってアナーキーです。したがって毎号何が出てくるかわからないのでスリリングでおもしろいです。もちろん、だからつまらないという人もたくさんいます。1回だけの寄稿者も多いけれど100回以上欠かさず参加して下さっている常連も何人もいます。

初めての寄稿者には、日本語か英語か中国語で自己紹介文を書いていただいています。僕自身は寄稿者のみなさんのページを見たり読んだりすることで35年間、人間的に成長させて頂いてきたので、商業誌では得られない最高の雑誌だと思っています。ほとんどのことにいいかげんな人間なのに年4回の『ブブ』発行日だけは一度も遅らせたことがないのです。でも編集発行人といっても、ただ集まってきた原稿を並べて印刷屋に出すだけです。僕がやっていなくても、これからは国境を越えて

こういう雑誌が世界中で登場してくると思っています。

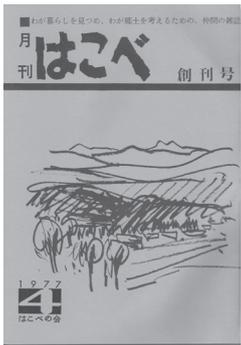
『ブブ』の誌名は漢字で書いて「武(ぶ)」と「無(ぶ)」です。「武」は戦う心のことで、「無」は老荘思想の「無」、遊ぶ心のことで。戦うことは遊ぶこと、遊ぶことは戦うこと。つまり拮抗力のことなのです。人生は絶対に負けてはいけません。どんな人間だって、生きるための1ページは必ず与えられているのだと思っています。でも同じく、それ以上に絶対に勝つてはいけません。生きるために必要なことはひとり1ページあれば充分なのです。勝たなくていいから最期まで常に拮抗し続けていくことが人生だと思っています。だから『ブブ』というのは誌名というより、拮抗しあうエネルギーの呼称だと思っています。世界中あちこちでそんな『BUBU』が作られていくと、だんだん地球の風通しがよくなっていくように思います。うまい下手とか優劣の尺度だけで見てしまうと、世のなか本当につまらないです。自分一人の小さな尺度では測れないひとりひとりの命がたくさんあるのですから。もしも本人が命がけて1ページを作って、それを読者の誰ひとりでも理解できず何の意味も見いだせないとしたら、それこそ最高の『BUBU』の価値ではないかと思っています。今は誰からも理解されない世界であっても、その1ページはたしかに世の中に発信されるのですから。——ということで。いつでも誰でも参加できるシキイの低い雑誌ですから、あなたも1ページ何かお書きになりませんか？



『BUBU』143号(2021年9月1日発行)



久保田 正明(はこべの会 事務局)



月刊『はこべ』創刊号、1977年4月1日発行、筆者提供

●月刊『はこべ』創刊のきっかけ

月刊誌『はこべ』の発刊は、松川町公民館から1976（昭和51）年2月1日発行の公民館報『まつかわ』148号にて、以下のように呼びかけがされました。

『町の文化月刊誌の発行』 町民の誰でもが「自由に投稿でき会員になって自発的に発行して行く、月刊誌の活動をはじめます。（中略）この雑誌が町民の建設的な文化の広場となるよう、その成長に夢を託しています。（後略）

この頃は町内の集落を単位とした婦人会や若妻会の学習会が毎晩のように行われ、公民館研究集会を拠点として、社会・体育・編集の各部の活動や、3地区の公民館協議会を拠点とした分館の活動がもりあがっていました。

それらの活動の中では「学習」が重視され高度成長の時期を経て、48年のオイルショックから、あらためて生活や地域を見直そうとする機運が醸成されて来ていました。

「公民館報は建設的な地域の住民の声を積極的に汲みあげて地域に提起するものであって、行政の広報ではない」という基本論に基づいて発行を続ける中で「建設的である」という判断をめぐる考えは、しばしば行政側と住民の立場に立とうとする公民館とのくいちがいが生じていました。

「館報は町の行政予算によって発行されるのだから、行政批判的な記事は掲載すべきではない」という考えに対して、「町の財源は住民の税金である。だから原則は住民の立場での意見を重

視すべきであり、『公的な教育活動』としての『社会教育活動』は行政に対しては一定の独自性を持っているのだから、住民の発言や主張については『建設的』な意味においての『自由』は最大限に保障されるべきである」ということをめぐる議論が絶えずなされてきました。

このような状況を視野において「誰でもが自由に自分の意見を発表できるような機会と場をつくる」ことの必要性和その「福祉的」意義が、編集部員会で確認されて具体的な取り組みとなり1977（昭和52）年4月1日に発足した「はこべの会」の「会誌」として同時に創刊されました。（「はこべ」は雑草の名前からです）

●「はこべの会」の活動について

地域の文化と福祉の向上に寄与することを目的とする「はこべの会」は、「わが暮らしを見つめ、わが郷土を考えるための、仲間の雑誌」というテーマを掲げ、月刊『はこべ』を創刊しました。

内容はレベルを問わず多岐にわたり「自由な発言の場」を守るために広告は掲載せず、会費のみで運営し、月額300円は41年目を迎え初めて月額100円の値上げをしました。創刊から43年を越えて月刊誌発行(欠号・合併号は無し、取材・編集・校正・発送作業)の他、毎年の新年会(会員相互の自由議論・懇談の場:昨年は中止)、座談会、映画会、講演会、演劇公演、コンサート、親睦会、旅行などの文化活動を行ってきました。



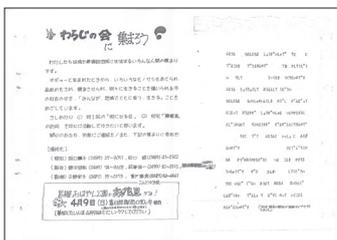
月刊『はこべ』534号、2021年9月1日発行（筆者提供）

一緒に地域を編む

わらじの会は1978年、埼玉県東部地区を中心に、「障害のある人もない人も共に街に出て生きよう」と誕生した。『月刊わらじ』は会発足当時から。初めの6年間は、毎月「例会」と称して、100人近くが各々の最寄りの駅から電車に乗って目的地へ集まり、遊んだり、バザーを開いたりした。バリアだらけの街でも人々が声をかけ合い、手を貸し借りすれば、楽しい街になる。その体験を『月刊わらじ』で発信した。

やがて活動拠点や店や介助システムや共同住居や全県連携網等が作られ、各々の事業運営に必要な社会福祉法人やNPO法人などを設立してきた。だが現在も、わらじの会には会則はなく、来た時が会員というアバウトな会として残っている。そして、『月刊わらじ』を発行し、バザー、交流合宿、クリスマス会を3大行事として毎年開催している。

活動が根を下ろすことで、『月刊わらじ』の中に、個人や場に根差した定点観測としての連載記事が増えてくる。39年間連載の「克己絵日記」の橋本は、聾で弱視、下肢マヒ。就学免除で20歳まで家の中で暮らし、会と出会って手動式チェーン車イスで外に出た。やはり39年間の「小さな新聞」の水谷は編集作業員で、耳鼻科の



『月刊わらじ』創刊号（1978年4月発行、筆者提供）

開業医。26年前には本田の「好人往還番日誌」が始まり、後に「隠居のくりごと・ざれごと日誌」に改題され今に至る。現在障害者生活支援センター勤務。25年前には今井の「日常茶飯事」が始まっている。彼女は診療所勤務の傍ら、埼玉障害者自立生活協会の事務局をしている。21年前からの「フラッシュバック研

水谷 淳子(『月刊わらじ』編集作業員)



究」の幡本は高機能自閉症で、企業で働いて、定期的に入浴介助などをしている。「手で読もう・手で話そう」の聾で片まひの荻野は、『月刊わらじ』の印刷主任でもある。この文は手話をしながら読むとわかる。

また「来た時が会員」として、活動を外にひらいてきた延長に、24年前からの特集記事がある。定番は、1月号の「ねんがまんが」、8月号の「せんそう」、12月号の「私の3大ニュース」。他の月はおしゃべりしながら決まっていく。編集作業といっても好きな人が5~6人集まってやっているだけで会で選ばれたわけでもない。25年前から、巽が編集作業に参加していつからか編集長になった。ダウン症で気配りの人だが、彼女の言葉を聞き取るのが難しい。彼女のご託宣で特集のテーマが決まることも多い。その彼女が主に原稿依頼の電話をする。「もしもしあたし」で始まる電話口の向こうで特集のテーマを四苦八苦して聞き取ろうとするやり取りは結構楽しい。彼女が依頼すると承諾率が高い。ついでに、大学を卒業してこの地を離れた人や、転居した人などと近況を交換するのも楽しみだ。

毎月第2水曜日10時、会関連の施設・べしみて『月刊わらじ』の印刷・製本・発送作業が行われる。施設利用者、職員、他団体の人、ボランティア希望者等40人程が集まって作業。おしゃべりや小競り合いで作業の手が止まったり、ブラブラ歩いているだけの人や、黙々と作業をする人。1000部作り700部を全国発送する。お母ちゃん達が作ってくれる昼ご飯を食べ、作業終了後は反省会と称する近況報告をして終了。コロナで緊急事態宣言が発せられていても変わらない風景だ。



『月刊わらじ』516号(2021年8月1日発行)

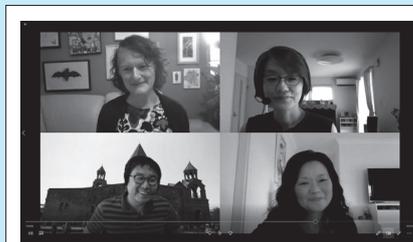
【コロナ対策はまだまだ続く】

前号をお届けしたのは、2回目の緊急事態宣言の頃でした。そして今号の編集作業は、4回目の緊急事態宣言中。現在、センターは開館はしているものの、同じ時間に資料を閲覧できるのはお2人まで、見学もお2人までです。資料整理を担当するリサーチ・アシスタント4名も、出勤2名、在宅勤務2名という状況が続いています。学内も、春学期は全員ではないにせよ学生さんがキャンパスに戻り、少しにぎやかになったのですが、秋学期はどうなることか…。

こういう状況では人の集まることは避けるしかないので、オンラインで小規模なイベントを開催してきました。2021年6月12日（土）には、資料情報や画像を登録・公開するシステムに関するミートアップ「オープンでフリーなAtoMを使う——導入時の工夫・これからの課題」を、そして7月31日（土）には、京都大学大学文書館との共催でオンラインセミナー「大学におけるデジタル・レコードキーピング——シドニー大学の挑戦」を実施しました。このイベントでは、オンライン会議システムに実装されている通訳機能を利用した同時通訳に初挑戦したのですが、通訳者の方のご尽力でたいへんよいコミュニケーションが実現しました。時差の問題さえクリアすれば海外の人とも気軽にやりとりできるのは、オンラインのよいところです。

また、そう頻繁ではないのですが、資料相談や見学もオンラインで実施しています。ノートパソコンをオンライン会議システムにつないだままブックトラックに載せて書庫を動き回ったり、書画カメラを接続して資料を見てもらったり——遠くにお住まいの方にはとても便利なので、コロナが収束しても続けたほうがよいかも？と考えています。

…というような試行錯誤に明け暮れていたなら、春学期中には！と思っていた『PRISM』の発行がまたまた秋にずれ込んでしまいました。反省です。今回ご寄稿くださったミニコミ発行者のみなさんのような「ミニコミ制作・発行を持続する力」を身につけるのは容易なことではなさそうです。前号同様、みなさまのお力をお借りできればと思います。この『PRISM』で読みたい記事のアイデアなどがあれば、ぜひご連絡くださいませ。



オンラインセミナー（2021/07/31）の様子

センター利用案内

★ご利用には事前予約が必要です。また、マスク着用・手指消毒など、新型コロナウイルス感染防止対策にご協力ください。

利用資格

- とくにありません。立教大学共生社会研究センター所蔵資料の利用を希望される方は、どなたでもご利用いただけます。
- 開館時間：月～金曜日（祝日をのぞく）10:00～12:00、13:00～16:00
- ただし、立教大学の一斉休業日のほか、資料整理などのため臨時に閉館する場合があります。その場合はあらかじめセンターホームページなどでお知らせいたします。

閲覧

- 初回に簡単な利用者登録をお願いいたします。
- 資料は閉架式で、貸し出しはしていません。
- 一部の資料については、プライバシー保護や資料保存などのため閲覧を制限する場合があります。詳しくはお問い合わせください。

【2021年度 センター組織】

運営委員会 高木 恒一（立教大学社会学部教授）センター長
市橋 秀美（埼玉大学大学院人文社会科学研究所教授）副センター長
石井 正子（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）副センター長
小野沢 あかね（立教大学文学部教授）運営委員
沼尻 晃伸（立教大学文学部教授）運営委員
町村 敬志（一橋大学大学院社会学部特任教授）運営委員
和田 悠（立教大学文学部教授）運営委員

リサーチ・アシスタント

阿部 晃平（立教大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程2年）
今井 麻美梨（立教大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程2年）
安藤 直之（立教大学大学院文学研究科教育学専攻研修生）
李 英美（立教大学兼任講師）

スタッフ 平野 泉・川路 さつき

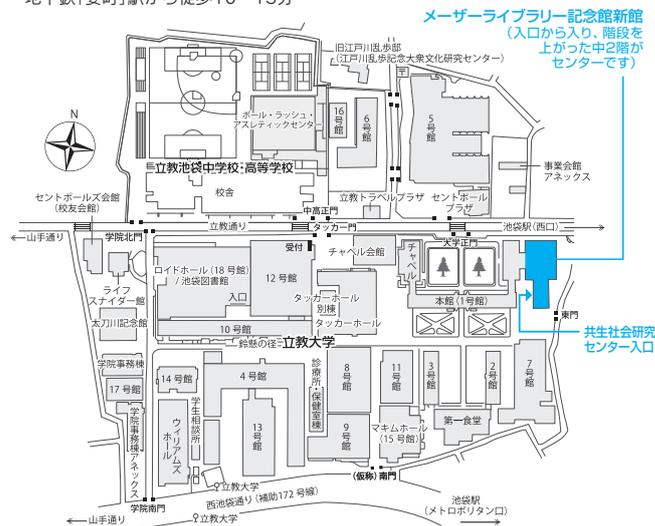
【お問い合わせ・ご予約は】

立教大学共生社会研究センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
電話：03-3985-4457 FAX：03-3985-4458
E-mail：kyousei@rikkyo.ac.jp

【センターへのアクセス】

JR・私鉄・地下鉄各線「池袋」駅・

地下鉄「要町」駅から徒歩10～15分



PRISM — A Newsletter of Research Center for Cooperative Civil Societies — No.16, Oct 2021

3-34-1 Nishi-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo, Japan 171-8501
Tel: +81-3-3985-4457 Fax: +81-3-3985-4458
E-mail: kyousei@rikkyo.ac.jp
http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/rcccs/



立教大学
RIKKYO UNIVERSITY